

# 《2004年12月例会報告》

【日 時】2004年12月22日（水）19：00～21：00（→その後「ルン」～2：00）

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【参加者（会員）】大橋二郎（大東文化大学） 加納樹里（中央大学） 田中理恵（(株)日本能率協会総合研究所） 茅野英一（かながわクラブ） 徳田仁（(株)セリエ） 名方幸彦（文京教育トラス） 中塚義実（筑波大学附属高校） 長谷川雅久（立教大学） 藤田稔人（レフェリー） 宮崎雄司（サッカーマニア編集長） 安松幹展（立教大学）

【参加者（未会員）】上倉将大（筑波大学大学院） 田中等志（筑波大学） 富島武史・中村和弘（東京リゾート&スポーツ専門学校） 早川直樹（日本サッカー協会）

【2次会のみ参加者】安藤裕一 両角晶仁 相原正道（未会員：ペヨンジュン似：筑波大学大学院）

【テーマ】代表チームからみたサッカー文化の違い

【報告者】早川直樹（日本代表チーム・トレーナー）

【コーディネーター】安松幹展

【報告書作成】中村和弘（DUOリーグトレーナー）

注）参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 代表チームからみたサッカー文化の違い

早川直樹（日本代表チーム・トレーナー）

\*\*\*\*\*

### <目次>

- I. はじめに
- II. 欧州と南米の違い
  - 1. 監督の役割
  - 2. 文化的背景
  - 3. 練習内容
  - 4. チームづくり
  - 5. 言葉の問題とミーティングの持ち方
  - 6. 監督の仕事
- III. 日本サッカーの方向性
  - 1. 日本サッカーが目指すスタイルは？
  - 2. 「個の強さ」がベース
  - 3. コミュニケーション・交流の大切さ
- IV. その他
  - 1. 選手・スタッフ・監督の関係
  - 2. 栄養指導について
- V. おわりに

## I. はじめに

安松：今日は代表チームのトレーナーをされている早川さんに来ていただくにあたり、サロン 2002 の趣旨からいってどういう話がマッチするかと考えたところ、トルシエ監督の時代からトレーナーを経験されているので、トルシエ監督とジーコ監督のもとでスタッフをされている経験から、南米とヨーロッパの文化の違いなどを話していただければと思います。

早川さんに今回お願いした一番の理由として、トルシエ監督とジーコ監督、二人の、僕らからみたらまったく違うタイプの監督の下でスタッフとして働いているということで、その違いからお話していただくということで。まだジーコ監督の時代は終わっていませんので、話しにくいことは選んでいただいて結構ですのでお願いします。

早川：まずはサロン 2002 の歴史がこんなにも長いことにびっくりしました。僕が経験してきた話ということなので気軽に聞いていただければと思います。

## II. 欧州と南米の違い

### 1. 監督の仕事

早川：99年からサッカー協会では活動を始めて4年間トルシエ監督と、2002年10月から約2年間ジーコ監督と仕事をさせてもらっています。この2人の監督の下で働いていて、僕が一番強く感じる点として、トルシエ監督は組織、システムを重視する、そしてジーコ監督は個を重視する、という点です。雑誌にもよく書かれていると思いますが、もう一つ、トルシエ監督はチームの中に競争意識を持ち込んでいる。2002年W杯の初戦当日のメンバー発表までが競争だというくらい強い意識で、当日まで先発メンバーがまったくわからず、とにかく最後まで競争させるのを重視していたのがトルシエ流でした。

トルシエ監督の場合は、明日の予定は前日の夜にならないとわからない、ましてや3日後、1週間後の予定なんかは試合の予定くらいしかわからないという方法でした。そこだけとってみても、ジーコ監督は精神的な安定を求めて、トルシエは競争意識だとか明日のことは直前にならないとわからないという、チームに常に緊張感を持たせるという意識でチーム作りをしていたのではないかと感じますね。

中塚：トルシエ監督のときにいきなり朝練をやったというのを聞いています。それは、いついかなる状況でもトップパフォーマンスを発揮するのをプレイヤーに求めていたのですか。

早川：そうですね。それもあるとは思いますが、まずひとつは意識改革があったと思います。4年間のうち後半になってくると朝練というのはほとんどなかったです。最初の1～2年目に、朝練のような時間に練習するのがたまにありました。まず、朝6時半から朝飯も食べずに練習をするということがプロの世界ではありえないだろうということをスタッフ含めみんなが思うわけですね。だけどそれをやらせることによって、今までとは違うという意識を植え付けさせたいというのがあったと思います。

最初は「何という人だ」という感じでした。ただ、僕がだんだん思ったのが、朝早くからの練習メニューは非常に怪我のリスクがない練習なんです。ほんとに基本的な技術の練習で、普通のランニングのようなものにボールを入れて行う形のもので、そこで怪我人が出たことは一度もなかったです。それなので、時間がたってくると、この人はちゃんと考えてメニューを組んでいるのだと

思いました。当たり前のことなのですが。

また、練習の直前にリラックスルームというのがあって、紅茶やビスケットなどが並んでいて、練習前に選手はそれをつまんで行くみたいな形だったんです。朝の練習が終わり、シャワーを浴びて、9時くらいから本当にみんながゆったりとした気持ちで食事に行くというものでした。次の練習は5時くらいからなのですが、そうすると朝やった練習というのは負荷もそんなにきつくないです。し昼寝もできるし、体の手入れをしたり体の回復にあてたり自分の好きな時間にしたり、リラックスする時間もたくさんあるので、今思えば非常に合理的なやり方だったなという気がしています。

## 2. 文化的背景

**藤田**：それはトルシエとジーコの選手としてのキャリアに影響しているのでしょうか。それともフランスとブラジルの文化に影響しているのですか。または両方混ざっている？

**早川**：キャリアはあまり関係ないと思います。文化の違いという気がしますね。僕の場合は、

**安松**：例えばJのクラブの中でもブラジルの監督とヨーロッパの監督とありますが、今お聞きしているとオシム監督はトルシエ監督に近いと思います。浦和の前監督のオジェック監督や名古屋にいたベンゲル監督もそのような雰囲気だと聞きました。ただ僕自身は、ブラジルの監督さんの場合、そのような話はあまり聞かないのですが、いかがですか？

**早川**：ヨーロッパの人たちの共通点はありますね。たとえばオシム監督は、練習の計画などは監督の頭の中では立てているらしいのですが、朝10時からの練習だとしたら9時半にみんなが集合したときに、スタッフたちも聞かされるらしいです。

やはり日本人のコーチの方々はしっかりと準備をして、事前に練習に使う道具を用意して、流れが滞らないようにオーガナイズして始めるというのは日本で良いとされているやり方だと思うのですが、オシム監督は全くそういう形を取っていないらしいです。それをコーチが教えて欲しいと言ったことがあるらしいのですが、グラウンドに出て選手の状態を見ていないのに何で練習内容なんか決められるのだと。そんなのはサッカーではない。事前にこれをやると決められるものじゃない、というのが考え方らしくて、それが良いか悪いか別として、オシム監督はそういう形ですよ。ブラジル、南米の指導者の方々は、予定をはっきりと決めていてスタイルを持っている。月曜日は何、火曜日は何と、一週間の流れが決まっていて、それを崩さないのが南米の方たちのスタイルだと思います。南米の監督と一緒に仕事するのはジーコ監督が初めてなので、その他の人と一緒に仕事したわけではないですし、Jでのほかのトレーナーの仲間たちから聞くとそんな感じですね。

**安松**：一般的な国民性からすると逆のような気がしますけどね。おもしろいですね。

**早川**：さっき藤田さんが言われた文化とキャリアの違いなのかというところだと、僕は文化の違いのような気がします。

**宮崎**：南米の場合、1週間2週間予定を決めないとき、選手が勝手に動いてしまうと聞きますが。

**早川**：そうですね。南米に勉強しに行った方に聞くと、そのようにしないとやらない、日本人みたいな選手ばかりじゃないから、とよく教えていただきますね。予定がわかってないとやられていかかとか。そんな選手ばかりではないのかもしれませんが、中にはそういう人たちもいて。でもヨーロッ

パでもそうだとはいいますけどね。

**安松：**そう考えると国民性というのはむしろ逆で、そこをコントロールするには逆の作用をしないといけないという、そういう捉え方もできますよね。

**早川：**そこは面白い考えですよ。あとはさっき2つ大きな点を挙げたのですが、それに関係して僕が最近すごく思うのが、ヨーロッパにしる南米にしる、監督というのは、その人の人生観やサッカー哲学が、チームを運営したりチームのルールを作ったりするときに、ものすごい細部まで関連するんだなというのは感じています。ジーコ監督の後は誰が監督をやるかというのをメディアでよく話をされていると思いますけど、日本人が監督をやった場合、トルシエやジーコみたいに細部まで影響させるのかなと個人的に感じるところです。

極端なことを言えば、食事の話なのですが、代表チームの食事って、ホテルに泊まるのでビュッフェ形式にたくさん出ているのですが、トルシエには食事が全然なってないと言われました。いろいろ話をしていると、こんな結婚式みたいな食事じゃだめだと。一流アスリートがこんな食事の仕方をしていたらチームは強くならない。もっとアスリートの食事を出せと言われました。逆にジーコは、その中から選手が必要なものを選んで食べるのがプロの食事だろうという考えです。そこは何の違いかわかりませんが、そういうところまで影響しますね。

そういうのは国民性も出るし、監督の考え方が細部にまでわたって出るところじゃないですかね。

トルシエの時に一番印象的だったのが、メディカルルームを作るときにメディカルルームに入ってきて、ここにどのようなものを置いて、床には物を置くなとか細かく言われました。何人かの監督さんとやらしてもらいましたが、レイアウトまで言う人は初めてでした。というのはトルシエが、自分だったらどうするかという、メディカルルームに対してもイメージが明確なものがあるから、こうした方が機能的だろうというので、メディカルの部分まで明確なものを持っているのだなという印象でしたね。

**安松：**僕も知識という面では違いがあるなというのはすごく思っていて、最初にトルシエ監督と会ったときには体力測定のとこで、白板にエネルギー供給システムの図を書いて、ここをトレーニングしたいと。自分で書けるくらいの知識があるというのは、かなりの知識があるということですね。

一度質問されたのが、シドニーオリンピックの前の国内での合宿で、試合前に何を食べるかと聞かれ、餅、おにぎり、うどんが並べられていて、どれが一番吸収が早くて試合に良いか選べと言われました。トルシエはそこで自分の意見もしっかりと言っていました。そういうところまで自分の考えを自信を持って言えるという点で、ヨーロッパの方はそういう知識を持っているのかなとも思いましたね。

**早川：**ヨーロッパの監督というのはピッチ上の監督というかGM(ゼネラルマネージャー)みたいな、チームをどう運営していくかとか、そういったところまで気持ちを張り巡らして、そういうところも教育されているみたいです。そういう観点からものを見るのもあります。

**名方：**一言で言うとジーコ監督やトルシエ監督はどういう人なのですか。

**早川：**二人ともいい人ですよ。手前味噌になりますが、僕の才能は監督を好きになること、監督を受け入れられるというのが人より強いと思いますね。ジーコ監督もトルシエ監督も僕にとって非常にすばらしい監督です。トルシエ監督はもっと評価されるべき人だと思います。今の日本サッカー界でのトルシエの功績というのは、何となく線香花火のように、帰ってしまったら語られてはいない

ですけど、トルシエが残したものだというのはものすごく大きいと思います。フランス W 杯のときは 1 点しか取れなくて全敗して、そういう歴史からたった 4 年しか経ってないのに勝ち点を取ってグループを突破してというのは、内部の人間の僕個人から言わせてもらえば、ホームのアドバンテージがあったにせよ、できすぎだろというぐらいに思っています。それくらい功績を残された方なので、もう少しトルシエ監督の良い所を、いろいろ考えたほうが良いのではないかなと。

**名方：**監督の資質としてどういうものが必要になってきますか。

**早川：**僕は統率力というものだと思いますね。強烈なリーダーシップがないと務まらないのではないかと思いますね。形はどうであれ圧倒的なものですよね。トルシエ監督はいろいろなことを言ってリーダーシップを取りました。それは選手としてのキャリアの違いがそうさせているのかもしれないですけど、どんな形であっても強烈なリーダーシップというのが無い限り監督というのは成功しないのではないかと思います。

**名方：**日本人の監督だと先ほど言ったリーダーシップは質が違うのですか。

**早川：**岡田監督とかは外から見ているとそんな感じがしますが。

**名方：**それは持って生まれたものであると思いますか、それとも訓練されたものだと。

**早川：**僕は訓練されたものだと思います。だから今日本がやっている指導者養成というのはものすごく大事だと思います。

### 3. 練習内容

**中塚：**トルシエはシャドートレーニングというのを取り入れていましたが、それまでの日本の指導者はそれほどやらなかったと思います。紅白戦みたいなのは、トルシエはぜんぜんやらなかったと聞いていますが。

**早川：**ほとんどやらなかったです、だから極端に練習での怪我人が少なかったです。ただサッカーは相手あってのものだからという気もしますが、トルシエは短期間で自分のイメージしているサッカーを人にやらせるのは上手なんじゃないですかね。自分のイメージすることを浸透させる手段としては、トルシエのやったことは良いと思います。

**安松：**シャドーだけでなく対人もあったじゃないですか。合宿の中で必ず一個やるという。そういうところでトルシエ監督が見るポイントもあったと言いますが。

**早川：**かといって対人になった時にぶつかり合うとかファウルになるとか一切言わないですね。むしろ叩きのめせぐらいの勢いです。その代わりに自分の体を守る術は知っているだろという言い方をしますね。それでもやはり怪我人は少なかったです。練習時間はコンパクトなので、1 時間半から長くて 2 時間です。時々とてつもないことが起こって 3 時間になることもあるのですが、それは年に 1 回か 2 回ですね。トルシエの場合は、選手から練習が軽すぎて動けないなんて声も出るくらいです。唯一許されていたのは怪我に対するトレーニングで、メディカルスタッフが許可したものなら良いと。自分で刺激入れたいからウェイトやスプリントするというのは駄目でした。

中塚：1時間半の練習量の中でフィジカルの練習もあるわけですね。

早川：そうですね。いつもあるわけではないですけど。あとウォーミングアップは、フィジカルコーチはやらないんですよ。それはトルシエが今日の目的にあわせたアップをやらせるわけです。

調整という話では、トルシエは、調整というのは一切許さなかったです。試合に向けてのトレーニング以外に調整するというのはなかったです。怪我人かチームで練習するかのどちらかでしたね。復帰する時はスポーツドクターと話し合っ、怪我の治りが完璧な状態でトルシエのところに行くという感じですね。先ほど言われたように、解剖学的な絵とかもすごく上手で知識もたくさんあるし。スポーツトレーナーのライセンスをフランスで取ってから監督になつたらしいですね。ヨーロッパの中でもそういう知識は高い監督なんじゃないかと思います。

怪我人については、メディカルスタッフが作り出していると言われたくらいですからね。明らかに外傷があつて捻挫をしてしまった時とかではなく、使い込み過ぎてなるスポーツ障害の時とかはあまり休みを認めてくれませんでした。ただそれも、僕らスタッフから言えば怪我のうちの一つなので、ここで休ませた方が試合には良いと思つても彼は認めませんでした。でもヨーロッパの監督はそういう考えの方は多いですよ。怪我に対しては自分が確認するまで認めませんでしたね。

#### 4. チームづくり

名方：先日水戸ホーリーホックのコーチと話したのですが、2軍の者に元気がないと。最近の若者には、自分の出番が回ってきたら「待ってました！」という気持ちが非常に薄いという話でした。代表になるとそういう切磋琢磨はすごいのですか。

早川：それは強いと思います。例えばですが、怪我人が出れば自分に出番が回ってくるくらいの気持ちは常に持っているとは思いますが、そのためにはいい準備をしておこうという意識は高いと思います。

名方：代表選手は大人と言いましたが、大人と言っても世間的にみればまだ若いですよ。それでも代表クラスになる人は違いますか。

早川：それはまあ個人差がありますね。そこで思い出したのですが、トルシエ監督は選手がまだまだ未熟だと言いましたね。人間としてもサッカー選手としても未熟だし、自分以外のスタッフも未熟だと言って、自分はすべてのスタッフに対して教育をしなくてはならないという使命感を持っていました。

#### 5. 言葉の問題とミーティングの持ち方

安松：いずれも外国人の監督ということで、言葉の問題があると思います。トルシエ監督の通訳は大変有名な人になりましたけど、ダバディさんと今の鈴木さんとの違い、もしくは通訳に関する考え方で何かあればお願いします。

早川：トルシエ監督がチームで使った通訳は2人で、一人はフランス在住の日本人の方で、もう一人はフローラン・ダバディさん。最初は選手、スタッフから見ても日本人の方がわかりやすく、トルシエ監督のイメージを僕らに伝えてくれる方でした。最終的にダバディになったのは、監督からみ

て自分のイメージや思っていることをたくさん伝えられるのがダバディだったんじゃないかと思えますね。それは僕らにではなく通訳にたくさん伝えられるということです。

中塚：最後のほうはトルシエ監督がダバディをリクエストしたのですか。

早川：そうです。日本人の方は他にも仕事もあるのでベタ付きは出来なかったというのもあるのですが。今ジーコ監督についている鈴木さんは、ジーコが日本に来たときから通訳をしている方で、通訳というよりは分身みたいな感じですね。鈴木さんに関してジーコは不信感を全く抱いてないし信頼しきっているという感じですね。鈴木さんは純粋な日本人なのですが、話してみるとこの人は日本人かブラジル人かわからなくなるくらいジーコファミリーの一人という感じですね。

安松：僕がこの質問をしたのは、ミーティングをトルシエはすごく大事にしている、話の持って行き方がうまいというのがあって、それを具現できるのはダバディしかいないのではないかと思ったからです。

早川：トルシエのミーティングは世間には出てないですけど、話の引き出し方はすごくて、全く違う社会情勢の話やヨーロッパのチャンピオンズリーグの話をして、例えば、時期は違うのですが、ユーロでのギリシャの躍進みたいな話があったらものすごくうまく話を引き出しますね。

安松：カピラ・ジェイが言っていたと人から聞いたのですが、DVD でトルシエのミーティングを見て、舞台俳優の自分から見ても素晴らしい俳優だと。伝わりやすい、素晴らしい抑揚だし、表情だし、タイミングだと。そういうテクニックというのはやはり文化なのですかね。

早川：今の日本での指導者養成の中にもディベートは授業としてやっています。Jリーグでの監督をするようなS級の指導者ではかなり力を入れていて、それはヨーロッパの指導者育成システムを参考にしているのかも知れません。理論をぶつけ合って相手を説得するようなことは監督の能力として必要となってきました。

安松：でも大人になってからというよりは、小学校や中学校時代からの導入教育というかコミュニケーションスキルというものからだと思いますが。

早川：サッカーの技術に関して、代表で何が足りないかというユースの世代まで問題が下ろされて、結局はやってないとうまくいかない、サッカー以外の部分でも小さいころからやってないと、という結論に繋がる感じですね。

中塚：JFAエリートプログラムではいろいろやりだしてますよね。

早川：いろんなことにトライし始めているみたいですね。でもサッカーがエリートプログラムをするのと青田買いしているみたいに思われて、他の競技からは大丈夫かみたいなことは言われますが。そんなことは全然ないんですけどね。

### Ⅲ. 日本サッカーの方向性

#### 1. 日本サッカーが目指すスタイルは？

田中：代表チームのなかではどこの国を参考にして活動をなさっているのですか。一つ前はフランスの監督だったのでしばらくフランス寄りのものになるかと思ったら、ブラジルの監督になっていた。今はどちら側なのですか。

早川：そういうのは僕よりもうちょっと上の方が決めているのですが。僕も聞いてみたいですね。

安松：監督が変わるころにちょうど会長も代わったじゃないですか。政治でいうと首相が変わるみたいなもので、今までのイメージを変えたいというのがあると思うのですが、たまたまそのタイミングになってしまったというのも今回はあると思います。

早川：少し前にジェフの監督でUEFAの技術委員長の方がいらっしゃって、その方がジェフのコーチに言っていた話で、中東の国がなぜ能力はあるのに強くならないかと聞かれたときに、中東はお金を使ってそのときの流行のサッカーをやろうとするからいけないと。そういうことをしていると、サッカーは根付かないし強くならないと思うと言われていました。ジェフはヨーロッパ、鹿島はブラジル一筋なのですが、田中さんがおっしゃったように、Jリーグにもふらふらしているチームがあって、先ほどの話も大きくずれてはいないと思います。

代表はトルシエ監督とジーコ監督のいいところをうまく取り入れて、それなりの形にしていかないとだめだと思います。一つのもを作り上げていかななくてはいけないので、外国の影響を受け続けるのではなく、どこかで日本の監督が指揮を取るのも必要なのではないかなとも思います。

藤田：どちらを目指すとかではなくて、南米のいいところ、欧州のいいところでどういうことが日本人に合うとか何かありますか。

早川：いい答えではないかもしれないですけど、2人の監督は両極端だなというのがありますね。もう少し中間の人がいればというのですが、それが一番日本人的な考え方で、やはり強さがないと思いますね。僕が答えようとしたのは、両方取り入れればという考えだったのですが、それが一番どっちつかずになり、日本のスタイルが何なのかという話になってしまいますよね。どっちがいいかというのは好き嫌いがでますよね。

名方：今の世界のサッカーで、どこの国のスタイルが伸びると思いますか。

早川：悩んでしまいますね。アメリカが伸びそうですが、あの国はマニュアル化するのが得意で、エリートプログラムや教育プログラムをシステム化するのが上手で、能力の高い人がそういうのに乗ってくれば後進国の中では割と頭角を現すのではないかと思います。

中国は、戦った感じではあまり怖くなかったですね。アジアカップの決勝戦が中国だったのですが、これは負けないなと感じました。選手に聞いたら、選手も戦いやすかったと言っていました。やるのが割りとわかるので、バーレーンやヨルダンとかと比べると戦いやすいと言っていました。

中塚：日本人と言っても昔と大きく変わっていて、一昔前までの高度経済成長時代の会社員のような、組織の中の一人というよりは、いまは個の存在になってきた若者たち。日本人にどちらが合っているというより、日本人がどんどん変わってきているので、一概に言えなくなってきているということもあると思います。

## 2. 「個の強さ」がベース



早川：今いろいろな世界大会に出ていて、もう一つ日本がステップアップするためには、個の強さを求めなければいけないと言われていています。いままでのやり方でベースとなる部分は確実に上がっているけど、このままではもう一歩上にはいけない。そこで、個を育てるということに目が向けられているんです。ただ今までやってきたことをやめて個を育てるといえるようにはならない方がいいと思うし、そのベースの上に、さらに個を育てなきゃいけないというように考えているのではないかと思います。

これからはユース世代の人も、いままで組織の練習に使っていた時間の中にどのように個の能力を伸ばす時間を組み込んでいくか、それとも時間を増やして個の練習を増やすのかということを考えていると思います。医科学的なことが発達してきて、これ以上やってはいけないこともあるし、科学がサッカーに入るのはいいことだと思いますが、現場ではうまくいかないところもあります。ギリギリのところまでやらないと体は強くなりませんし、技術も高まりませんしね。

加納：個を強くしないことには組織の強化はないというのはわかるのですが、個を強くするというので科学を使って強くするというのは、もっと若い時期から始めても良いのではないかなと思うのですが。あと人格の強さというのも。フィールドの中だけでなく、普段の生活の中から育てられていくものだと思うのですが。

早川：育成の指導者が集まると必ず出る話なのですが、画一的なものを学ぶ事が日本人は得意です。しかし、みんな同じようになってしまうというのがあります。でもそれはベースを上げている面もあるので、そこは否定するところではないと思います。そこから個を、人格の面や技術の面でも出していくようにすれば良い。まさにみんな同じで、アンダーの代表チームを持っている監督さんも同じようなことを言っていますね。

加納：トルシエ監督は選手に、海外へ行ったときにその国の文化を学べとか、郷に入れば郷に従え的なことを言っていたらしいのですが、私は一理あると思います。日本人というのは日本の風土で、日本の食事に慣れているというのがあって、それはベースとしてはいいのですが、やはり海外へ行って強く戦っていくには必要だと思います。

早川：トルシエ監督と初めて海外遠征に行った時の話なのですが、ドクターがその国で何を食べていか何がだめかと指示していたら、そんな事するなと怒られました。そんなことをしていたら強くなれないぞと言われてました。医学の面からみたら、感染症の疑いもあるので、食べとは言えないのですが、トルシエ監督は当たり前と言いますね。予防接種の時にも似たような話がありました。私ももっと喧嘩しなきゃだめだと言われてましたが、もしかしたらそこが日本人の足りないところであるのかなと。

安松：人格形成とかパフォーマンスに影響しているかもしれませんね。トルシエ監督は海外遠征にいったらかなりの割合で施設訪問に行ったり、合宿に行ったら小学生との交流を持ったりとか、選手を育てるために異質なところに放り込んで反応させるということをやっていましたよね。

早川：そういうところで選手のパーソナリティなどを見るのが好きでしたね。今思い出したのが、遠征中に外出を強要して、ホテルにはいないで外で休養を取って来いとかありましたね。でもチームの中ではガッと縛るわけですよ。フリーになったらお前らの責任という感じです。トルシエ監督は日本のことはあまり知らないみたいでしたけど、そこをダバディが埋めているというのはありました。文化にはすごく興味のある人だったので、歴史的な背景を吸収して日本人に話をしていました。

ジーコ監督はそういうのを自分の目で確認しています。

### 3. コミュニケーション・交流の大切さ

**藤田：**今、トルシエの話で文化のことが出たのですが、個を強くする、人格を育てるということに関係するかも知れませんが、日本人はサッカーをすることが目的であるけど、ヨーロッパはサッカーという文化を通じて地域社会に関わりを持ったり交流を持ったりしますよね。僕はイングランドに選手として行ってサッカーをしたことがあるのですが、試合後にクラブハウスでのアフターマッチファンクションのような懇親会や、選手やコーチ、監督、レフェリーを含めてやりますね。そういう中で交流を深めて選手として成長していこうという意味がトルシエ監督は強いということですね。

**早川：**そうですね。レセプションなんかは、日本のチームは面倒くさがる人が多いと思います。監督本人がそういう場所が好きというのもあると思いますが、ちゃんと準備をして、監督、コーチ、だけでなくスタッフも、各セクションから必ず一人出るという具合にしますね。そういうところで日本人は固まっていてだめだとは言っていましたね。どんどん自分から行かないと、サッカー選手としても成長しないと。トルシエ監督の根底にある感覚だと思います。

**藤田：**日本で言うと、学校教育の中でサッカーをやっていくことの限界だったりしますよね。クラブチームでやらなければいけないこともありますし。

**早川：**みんなで集まって親睦を深めるとか、試合のあとにそういうことをやるという習慣が日本にはあまりないですよ。大分にオランダ人の監督がいて、今年で退任されたのですが、大分はホームで試合があった時にはスタジアムの一室に食事が用意されているらしいのです。試合が終わるとそこに集まって、選手とその家族と一緒に夕食を食べるというのがあって、それから解散だったらしいです。そういうのを聞いたのはJのクラブでは初めてだったので、ホームでしかできないことですが、日本人の監督にはない感覚だなと思いました。

**安松：**食事の話ですが、日本人は終わるとすぐ帰ってしまいますよね。

**早川：**それはトルシエ監督にはすごく言われましたね。食事会場にいなさ過ぎると。そこはゆったりしてコミュニケーションをとる場所だから、その時間をもっと大切にしろと。長くいられるためにお茶や菓子などを工夫して入れろ、それも毎日じゃなく、いいタイミングで出して場を作れと言いましたね。選手がずっと一緒という感覚で和気藹々の感じがトルシエ監督は嫌いで、危険信号だとも言っていました。

すごく印象的だったのは、いろいろな問題があってスタッフ間がギクシャクしていた時だったのですが、「チームの中がうまくいっている時にいい結果が出るわけではない」と。チームの中に問題があっても結果が出る時は出ると言って、チームの中は社会と一緒に、いろんな問題が起きながら目的に向かっていくのであって、いつもうまくいくなんてありえないと。問題が起きているということはごく普通のことであって、それを気にすることはないとされたのがすごく印象に残りました。

**安松：**確かにサッカーをやっていると理不尽なことは起こりますよね。そういう理不尽さを耐えるには昔の非科学的なトレーニングもいいのかなんて思いますよね。

？：トルシエ監督は選手同士サッカーについてのディスカッションさせてたりしていたのですか。

早川：そういう場所は持たせていませんでしたね。それは自分たちでやるのが当たり前だろという考えでした。サッカーだけでなく、とにかくコミュニケーションをとれというのは言っていました。部屋は体を休める場所で、外に出たら社交性を持てとも言っていました。ジーコ監督もそこはあまり言いません。選手同士がディスカッションする場を作ることもされません。

安松：感情を表に出す監督の場合、スタッフは時にはストレスを感じるかもしれないけど、わかりやすいというのはありますよね。逆に出さない監督は、この人は何を考えているのだろうというのはありませんか。

早川：すごくありますね。自分が評価されているのかどうなのかわからないですね。トルシエの場合はこの部分では認められて、ここでは駄目なのだなというのがわかりました。

安松：これはフランス人の性格なのかわからないのですが、彼らはものすごく喧嘩するじゃないですか。スタッフの間でも。でも次の日にはケロッとしている。僕もフィジカルコーチにもものすごく怒られて、その日は口も聞いてくれない位だったのですが、次の日には一緒にやるぞという感じに戻っていました。そういうのは国民性というか、それはパーソナリティでは無い気がしますよね。

早川：それは違いがあると思いますね。ブラジル人のスタッフは本当に仲が良くて、喧嘩は見たことないです。でもJのクラブの人に聞くと、初めは仲が良くても、喧嘩すると必ずブラジル人同士が始めるって言っていました。そしてなかなか関係が修復できないとも言っていました。

ヨーロッパの人はまた逆で、フランクというスタッフがトルシエとW杯の期間中に、朝に喧嘩していて、昼飯の時にはもう仲直りして一緒に食べているというのはありましたね。そこも南米とヨーロッパの違いが大きいですね。

## IV. その他

### 1. 選手・スタッフ・監督の関係

田中：さっきの話で、ジーコ監督はメディカルスタッフに従うというのがあったのですが、コンディションの悪い選手も試合に出ているというのが話題になったと思います。というのは、ジーコ監督からみれば、スタッフに止められないくらいの状態なら、少しコンディションが悪くてもジーコ監督には関係ないということですか。

早川：そうですね。指導者の人はみんなそうだと思うのですが、ピッチの中でサッカーができればそれで良いという考えが圧倒的に多いです。ドクターがストップするのは、怪我とか病気の場合がほとんどです。フィジカルコンディションが悪い場合は、コーチが判断してジーコに言うのが普通ですね。コーチが言う場合、プレーはできるけどトップパフォーマンスではないという時に監督と話すというのがありますね。医者の世界ならリスクを負わないのが一番ですが、現場ではそうは行かないところなので、ドクターもアスレティックトレーナーもそこを理解している方でないと現場では機能しないし、監督からも信用されないですね。休めというのは簡単で、どこまでリスクを背負えるかというのが大切です。あまり危険なことをすると僕らの責任にもなるので、監督の哲学や

考え方を知る必要があります。

？：トルシエの最後のころに川淵キャプテンが言っていたと思うのですが、得点シーンなどで監督と選手が抱き合わないというのを聞いてトルシエはわざと壁を作っていたのかなと思うのですが。

早川：監督と選手の距離感は大事にしていましたね。監督がすべてを決めるという考えでしたし。それくらい自分の立場をはっきりさせていました。監督がいてスタッフがいて選手という立場をしっかりしていました。

でもジーコになってからも選手は来ないですよ。Jでもあまり見ない気がするので監督が誰だからというのは無いと思います。でもスタッフは、みんな終わったあと抱き合ったりしていましたけどね。

トルシエは練習もほとんど非公開でしたしね。メディアに見せたくない理由は、選手が集中できないからだと言っていました。ジーコの場合、試合中はみんなが見ている中でやるのだから、練習もそれでいいだろうという考えですが。必ず練習終わったあとにメディアと接触する場面を作りますね。でもトルシエは3日に1回とかです。トルシエ自身が会見を拒否するのは何回もありましたし。メディアに対しても全然違いますね。

名方：チームの力を100とした場合、監督の割合はどんな感じになりますか。

早川：圧倒的に監督と選手ですね。僕は監督が相当大事だと思っています。よく監督が駄目でも優秀な選手がいれば大丈夫とか聞きますが、代表などの高いレベルになるほど監督は重要だと思います。

## 2. 栄養指導について

名方：先ほど食堂の話がされましたが、日本代表クラスでは栄養の専門家もついているし、個々人での食べ方など合わせてメニューができていると思いますが、その上であとは自由に食べなさいと言っているのか、それともトップの試合の前には指導みたいのがあるのですか。

早川：個人のメニューは組んでいません。ただ全体に対して鍛練期、体を強化する時期に対してのメニューであったり、疲労の回復でとにかくエネルギーを蓄えなくてはいけないとかそういう感じに分けて管理栄養士がメニューを組むという形です。

名方：例えば浦和から解雇されて横浜に行った河合なんかは生活環境を変えて7キロの減量をしたそうですが、食生活の方でもきちっとやられているのかなと思ったのですが。

早川：代表チームではやってないですね。活動期間がすごく短いのもあるし、目標が一つの試合であると限られていますし、もちろん長い目で見れば今から最終予選、本大会とありますけど代表チームで活動するのは120～130日なのでほとんどは所属クラブで活動していますので日常生活の中で体を作るところはクラブでやられているというのが現状です。代表チームはその選手たちを借りてきて一定のコンディションや準備をするという形なのでチームとしてはやっていいますが個々まではやっていないですね。

名方：トレセンなどでは選手の筋肉量などに合わせてやっていたりしているのですか。

早川：栄養指導はしていますがメニューを組むとかはしてないですね。トレセンではしっかりと食べることや基本的な五大栄養素の話などしますが、子供は理解できないですし、何よりも好き嫌いしないで食べることなど、ごく一般的なことを中心に教えています。

## V. おわりに

安松：話の途中ですがそろそろ時間です。実は田村さんという、トルシエのことをずっと書いている方がいるのですが、ある雑誌の彼の記事の中で、トルシエが連れて行きたい唯一の日本人というのに早川さんが紹介されています。それほど信頼されている方だということです。

アジアと日本についても話をお聞きしたかったのですが、これは来年から始まる最終予選が一段落する9月ころにぜひまた来ていただいてお話してもらえたらということをお願いして、今回は終わりたいと思います。

以上